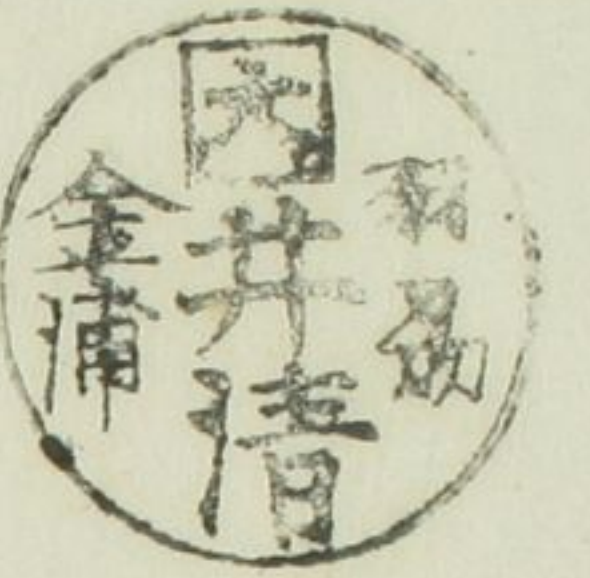
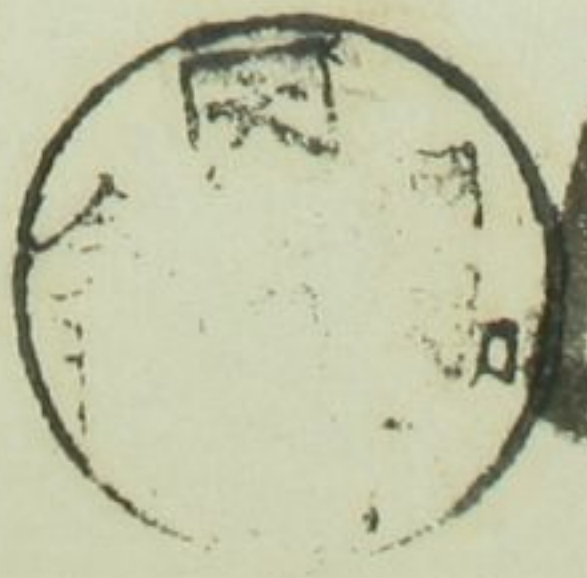


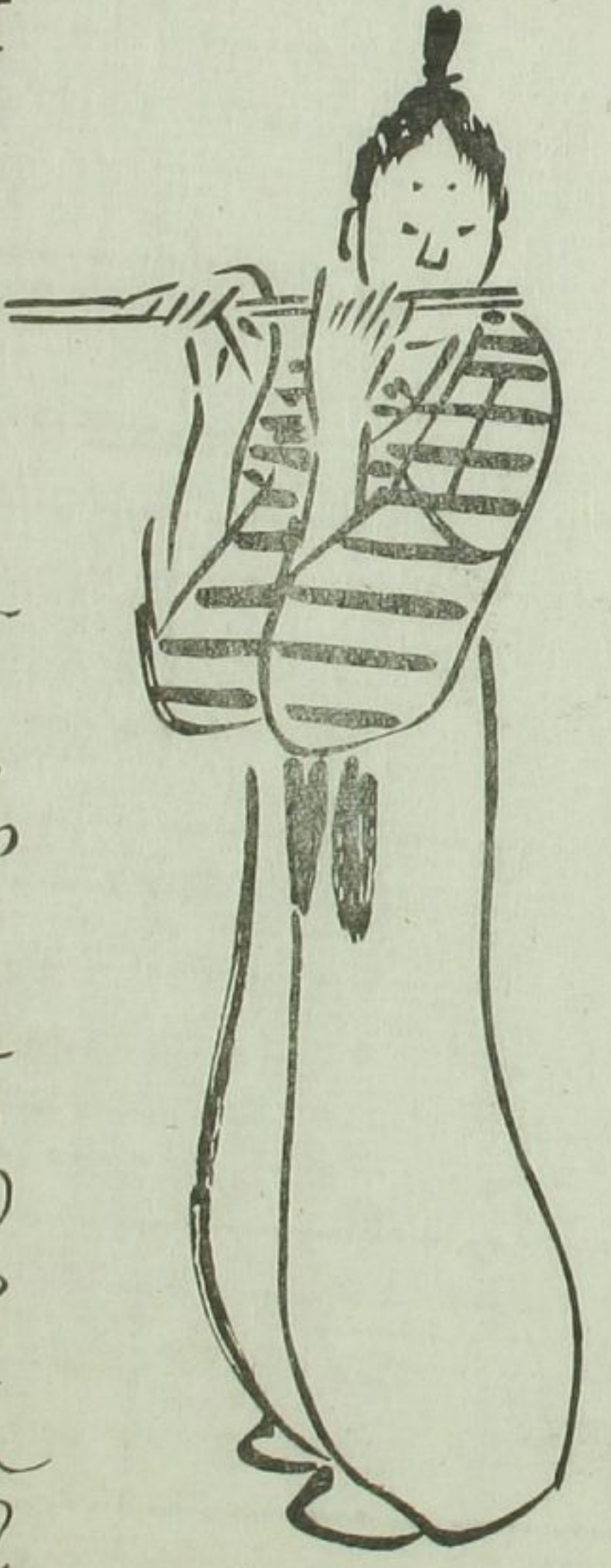
子ておひさ美おは
 うたかたの物さそ



井氏



描筆云々
 係子
 紙筆



何れを
 描筆
 変化
 入ん

勺のあつちんとおもへるあま
 りやけららみ得えおふも
 又あつちんお勺のせもいっ
 有愛りあつちん けえあふ

文化二年二月二十日の
 二十一日の明りあふ

ナーのありあつちん



電のさくさくさくさくさく
 わりしとらふのまふひやふまのふ

千丈
 江電

海かもつれ男旅人の
 馬がうらも先まふ

木曾川のさくさくさくさく
 柿のさくさくさくさく
 山さくさくさくさく

南江
 桂五
 一草

うめとす向と桃の花の客

なま

川風を今に空しやま

塩さ

蝉の音竹をまもや

空行

紅葉も散るも九いろ

柳波

鞍堂と園位修あり

合歡笑やせあうんたる

野花

行園も泉もさるり

散くの茶もふりやうめ

蛙文

峯と木白く里子ま

山の梅咲て小豆のさへし

嵐外

くさくさ先と草植 白子

有愛

響るまけを歌の寒き雨降

陶松

塩氣のたつ方有明の月

本年

芦の穂のま移りれ家上

雄生

赤い勝船のありの空

外

年々の烈はちと伊勢熊野

愛

才ハ息ヲ子梳テ湯飲取
 燕子を吸て河川ちく眼を差し
 蟹のやとからやとくちりり
 我意ハ朝食殿ときく伝へ
 人一人の浮世の中
 花の着おし午の行く膳立す
 稲妻もれもおもふはら
 三つ三つ月夜の氣
 生年松 蟹外 生年 松

何仏のわあうとまきまそ
 花ありといひあはさ夏ちりし
 朝くさるも野を焼くうり
 瓶あは葉子の窓とあはそおき
 今や瓶の塚への雨
 宛上川む女一舟り
 葉句瓶きけも宗因り意
 咲きききふい葉りふい百合
 生年松 蟹外 生年 松

氣先のよらやまのきの
 托ふく 新萱堂の鍵と持
 主も氣来も皆目ぢりくさ
 いすぬい人があしらの板原
 飛くまの流や飛よまのす
 唐番の来ふの月よあはり
 ちりちり手紙やく麻のかり売
 初くと神田糸の小扇の石
 年 生 松 外 年 生 松 外

画師の川移り二折目の家
 清きしちあき竹のすく 老初
 花えこのころ八只うぢる馬
 お豆も田鯉もけの名よと也
 急ほしあしかの春風のそ
 年 生 松 外

竹田の画く林とや画し
 雪のうけよ来し者も二日
 風更

学や竹の子さくら市もさくら

巢兆

馬子のつりしる男ふり田里と
お卯しきほりしるちりり
はくしれおあさる

笠とくんと学もいふ天気がいれ

且見

り春や馬の香る川席のお

蕉雨

鶴もいふさる

木の勢小松の勢も明寒

ちよ丸

けろしと春は降ぬれ小雨か

瑞る

翁の道朝も来や山の月

田禾

涼しさと杭無牛もつちりぬ

蒼丸

寺の晩鐘守りしる

鶏れや嘯うけり山は所

恒丸

流のりしる

標ちり中にもうした月夜か

陶松

足洗ふ清水は流し松の門

碇山

先程系へさうつけて来り時雨か

門上

枯木吹音さへ花のからびり

桐亭

寒物そ見ゆる二月の柳か

真旧

静るれ暖はほきりう年忘れ

寧園

草むしや灯もこゝろの代も

雪帶

利風や羽翫よらば竹の先

文兆

宗も宗細し今一人

何知うたむやうにけしむ

行燈うらみと柳の心すぬ

柳朴

けちやしと人のあはれか

岳松

こゝろのこゝろ

青柳もほそあきよも言の子

八束

暮の雨鳥の足り池のほく

玉葉

家つゝきり

ワの糸指筆そからぬ鶺鴒

若人

四方かき向ふんそほる

了平

くさくさの声や雨さへ

如聖

明や月夜舟やとおもひらけむ

金英

此時のまはる

初しる紅葉ののりもろく

五芳

あやしきる。船のちり

ゆしつるに存もおもはる川

有斐

と川舟も流すつづ。都島

嵐介

この扉さうたう

けろしと夜の花ちる火の梳

長高

嵐あしとつふ声小夜も又とる

成美

今やまの川の帆とつと合を

鬼田

橋ちる夜のまのり暮るのちり

椿寺

柿のちよとさしこかけと三日月

厚池

山さしちりく任如ももの
野へく遠くあそびたをれ
て家のりく知えたり

相合しき穴へつとむ。柿のむ

冬化

暮風の吹や小島のむろり啼

響之

きつふくく学術館を喘 陸 乙堂

降し雪のりよちういふいふ 丘

月れくぬぬそのにそおけ樹を しこ

正月の藪もゆこま 標のそら 高叢

草よ入てゆや法後の解の歌 何處

芦荻つゝたる歌

我家知まきや田所しの雪の意 魚堂

似し歌とつくくくもや花の月 慕雄

三くう二人むい居て 酒のむい

柿一輪二輪よ日暮き川や守 右冬

杓祀おきまゝ 田の猪垣 草花

春の雪橋の底知踏へる 植村

共あよあゝむい 曉の歌 序三

時よぬ月をけ戸よをりもえ 漫

暮あきの売より雨はすい 夜

戸かのの鳥つゝ鳥羽よ歌 九

山 母 子 恋 づ け 半 斗 乞 へ し
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
か く や 娘 さ し 糸 へ け け 子
雲 降 り せ 今 年 も う れ ち ち
茶 臼 つ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ
明 子 繩 係 り 程 々 人 々 あり け
噺 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
十 五 日 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
漫 三 村 九 登 漫 三 村

鰐 の 骨 の 刺 し 一 一 一 一 一
大 山 や 名 古 屋 の 花 も えて 一 一 一
扱 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
陽 光 酒 一 一 一 一 一 一 一 一 一
翌 日 の 足 駢 一 一 一 一 一 一 一
み 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
夕 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
夫 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
村 九 漫 三 村 九 漫 三 村

三 命もあき夏の見明し
 三 歌路や鳥城の上葉を喰海り
 初 亂咲て笑ふくら 晴き
 子 規あけし 鳥籠とくらし
 去 せしま 着す 黒き 袖
 寒 けけし 簾吹花の月夜に
 身 をおきつけし 恋の 枕
 大 机きく 貝書や子 書る 之
 三 漫 九 村 漫 三 九 漫 三

朝いの床のとも 定めの
 去れしき 文つら 片 簾
 浅 間とんてい 滞 留の 声
 りも 今も かしら くら ぐら む 書り
 わ しく 飛り ぬく くら び 守
 三 漫 九 村 漫 三 九 漫 三

三月のころの死おの死
 何あてりし 中に ちか 様か
 九 琴

茶のむやみ嵐うよふ盆の歌
かほりしれ歩かうちよき鳥鳴り
為永
田瑞

神皇正統記

湖へもやうけあふ年の柳うさ
銭百と人のうらりり年のうら
葛と

算よる石竹歌

若竹よかうれぬその念佛か
鶺鴒こころあゆみ野うら
魯原
徳白

起しよ花えふ家の茶けられ
ちうあ茶の亦留の春の月
七初
し心

摩月柳の答
大寺いさか

道湿しけ輪車よ柳の月
探う者も足手印のてん山の家
梅うやよく見てももも松一か
芦涯
てに
方居

柴荊人のつねの人

鳥のまに山知ゆらうら
栞
五月午

紅紫を以て油紙子も不怠の

祇迄

帛ふにほま三日のまゝぬ雪の空

斗九象

柿のむさぎと子履のあゝまかし

泉雅

存るぬありれかゝも春の月

櫻を

望いそるれ

子鞋とさけし

旅うれし人よ枕のあゝか

吐丸

着すし女の老たるは

きそるき

淋しきや紅柿のの小盃

槌を

ふしも月の名ふよあゝ

古汝

いつたふたうともるれ柿のむ

木鶏

あゝおの磯より柳の

たもをうれし

磯流や柳も二月のそれくし

太年

きふりうれ限も菊の香は匂ふ

有中

かゝつていひつゝもあゝ早苗

柳花

大雨のあゝれどや草の花

漫々

あゝしとくもふあゝやうり蛙

序三

かゝる葉も蒼々も持りし木のむ 正竹

長明齋心集書りし伝

来て燕の鳥いこへん桐一葉 春唄
此先の遠くをさうもらう子 うき

菰中書屋

木さくやも移りし虫に這より 若兒
草鞋くく旅のさへひとりの声 朝平
大さくはる雪の降之清長の鐘 希之

蕎麦麦もしらむらうき日之か 松兄

砧く萬々ひかふし

村の末や寔の庭なる山ありし 魚之
乾きし川て竹もさうく冬の竹 鱈魚
朝霞何頃ありく星の火 釣雪
朝霞や人よちよる間のみ 丁敷里

三人のききり

五た初も飯くし木の草海く 雄生

鶯よ菴のつねらふ小鳥の

南島

田子鳥の？耳見馬の

主川

くまも思ひほる丸猫の

志願

木の間に鈴つゝな

夏もやし湖水よふ山の家

藤丸

青空し小田のへりり人のけ

栢田

袴をて手紙懐子

氷仙も鼻こぼるしき白ひか

花年

蓬萊や明もつれたる酒方の湖

小湊

ちろくと蟹の小道の栢のむ

王夢

涼しこの草取つゝささるま

栢栖

杖を翻るしかやん

二番手れ花のゆらや瀧の糸

水布

草の葉のまをまき合ふ葉月か

毛翠

稲妻よ小笹の雲のちかむらり

天光

よきよりおんよ年しりのむの岩

草花

春の月けすいしと明るる
如りや津の味 嗚れ青くさき

仙市
鶴見

年雨の美人

風去ぬむも落り床の上

玉風

経路のまじりにやして

旅の長も又う寝るのゆく返り
しれも亦も幾も兼も秋のころ日た
薄くしとあこに萱や春の水

正門
嵐夕
長岡

花うまうあそこへく古 簾

亀嶽

宿より他路のやう

残、船、佛のうくくり水くれ

艶守

男とももあそもあそび

一生の草鞋つくりの雪の宿

久昌

鳴子川人こつけおし

一之

子のちあにちあもあそび

松屋

鶯、柳、の、の、野、山、了、南

朱紀

啼きそい雨の白なり 妹 芥子

呉来

む桔更布しけ笑てしむひり

木年

月し空よりれたる名之春のえ

名亮

虎杖の草みだつてぬく木も海か

壺徳

朝より月も鳥のくさるしん

青心

やや 影れ 影れ 影れ

宵寐してけ山里のさあれ 月

三枝

老ぬもい念れ人のやいれ

呉山

志ほしたる 夢もやれ 冬の暮

泉行

草の山 芒のさき 移るしん

芦頂

其血 草中 影れ 影れ

甘菊 白きくさる年より菊のむ

花を

木のかけ 影れ 影れ

若草のさき 影れ 影れ 影れ

松溪

鞍臺や 影れ 影れ 影れ

河入

朝鳥や 影れ 影れ 影れ

其也

象形をやもあつて極意を
 鷗の尻に吹ちまてよ川時雨
 名目や芦の一夜がはさうに
 学んできや木代の末のうらに
 川とておれま鹿の勢

月影 斗嶽 徳孝 芦川



井氏

